

自由連想の歴史的背景

Historical background of Free Association

土屋 満知

愛知みずほ大学人間科学部

Machi TSUCHIYA

Faculty of Human Science, Aichi Mizuho College

要旨

本研究は、S.Freudの自由連想 (free association, freien Assoziationen) が「AA.Brillの英訳段階における誤訳であった」というC.Rycroft (1968)の指摘を検討した文献研究である。S.Freudは、初期の臨床事例論文“Studien über Hysterie ヒステリー研究”(1895)の中で、連想に繋がる‘Einfälle’を使い始めており、“Die Traumdeutung 夢判断”(1900)において、‘freisteigende Einfälle’ (自由に浮かび上がってくる思いつき) という表現になっている。更に、S.Freudは、1909年アメリカの大学での5回連続講演においては、‘freien Assoziationen (自由連想)’と言っている等の文献研究結果を照らし合わせながら「AA.Brillの誤訳(mistranslation)である」の背景について検討・考察した。

キーワード: 自由連想 (法) ; freisteigende Einfälle から freien Assoziationen ; ヒステリー研究

I. 問題と目的

Peter Gayが、S.Freudにまつわるすべてを時代のうねりを描き尽くした伝記的決定版といわれる「フロイト」(1988)の<はしがき>の冒頭において、S.Freudが、いかに自分の生い立ち、伝記に触れられることに警戒しており、資料を残さないようにしていたのかについて記述している。S.Freudは、29歳の時に婚約者に次のように打ち明けている。

“ぼくはある計画をほぼ完璧にやり遂げました・・・ぼくは過去14年間にわたるノート全部と、手紙、論文の抜粋、そして原稿を廃棄してしまいました。ただし手紙のうち、家族の手紙だけは取ってあります・・・やがて彼の伝記を書くであろう人びとに対しては微塵の容赦もない。「伝記作家さんたちはさんざん苦勞すればいいのです。そんなに簡単に書いてもらうわけにはいきません」。フロイトはさらに、彼らがどれほど見当違いのことを書くか、今から楽しみだ、とさえ書いている。この本のために調べものをし、筆をすすめている間に、何度この情景が眼に浮かんだことだろう”(p.

VII).

このP.Gayの文章を読みながら、この研究を通して、S.Freudの学問的人間関係や自由連想法という無意識の心を捉えようと言う方法の成り立ちについて、《重箱の隅をつつくように》浮かび上がらせたいというこの論文の意図はS.Freudにとっては、歓迎されない領域のことであることを知った上で、S.Freudに関しての「自由連想の歴史的背景」というこの論をすすめたい。

Charles Rycroft(1968)の“A Critical Dictionary of PSYCHOANALYSIS”(日本版の書籍名「精神分析学辞典」)のFREE ASSOCIATION (自由連想)の項を見ると、“Brill’s mistranslation of Freud’s ‘freier Einfall’, which has, however, become the accepted term in English. Einfall means ‘irruption’, ‘sudden idea’, not ‘association’ and the concept refers to ideas which occur to one spontaneously, without straining.” (p.54)である。

このCharles Rycroftの“A Critical Dictionary of PSYCHOANALYSIS”は1968年にTomas Nelson

Sons から出版されており、1972 年以降は、Penguin Reference Books の精神分析学辞典として出版されている。日本においては、Tomas Nelson Sons の 1968 年版が河出書房新社（山口泰司訳）から出版されており、以下のようになっている。

“自由連想(法) Free Association フロイトの freier Einfall というドイツ語の、ブリル Brill による誤訳であるが、英語ではこの用語が容認されるに到っている。Einfall という語は、「連想」という意味ではなく、「乱入」や「突発的な観念」といった意味を表しているのので、この概念は努力なしに自然に浮かんで来る観念を指すのである。”(p.100)

確かに、Einfall を Brockhaus 独英辞典で引くと、Einfall/ ①sudden idea(fancy) ②[military] invasion, incursion ③ the collapse of the house ④ the incidence of light とあり、Einfall の語義は Rycroft の説明の通りである。

本研究の問題意識の発端はここにあった。以下 3 点の問題意識を検討説明することが、本研究の目的である。

【問題 1】C.Rycroft が言うように、現在では《S.Freud の自由連想(法) free association》という言い方が普通になっているのであるが、これは AA.Brill の単純な誤訳が発端であったのか、S.Freud は、AA.Brill の Free Association と自分の freier Einfall の関連性をどうみていたのであるのか。

【問題 2】S.Freud と AA.Brill は、また AA.Brill と他の精神分析の研究者たちは、精神分析学グループの中にあつて、どういう関係性の中にいたのか。

【問題 3】S.Freud は、どういう治療経験の経過の中で治療方法としての自由連想に辿りついたのか。

II. S.Freud の自由連想(法)という表現の源は、S.Freud の著作を英訳した AA.Brill の誤訳にあったのか？

S.Freud は、「自叙・精神分析」(1925)において、“精神分析の展開とその内容について私がはじめて語ったのは、1909 年、創立二十周年のお祝いに招聘されたマサチューセッツ州ウースターのクラーク大学での 5 回の講演においてであった。”(pp.3-4)

“当時私は、ようやく 53 歳、若く、健康だと感じていた。新世界への暫時の滞在は私の自信を強めてくれた。ヨーロッパではまるでのけ者にされているような感があったが、アメリカでは、もっとも優れた人びとから同等の人間として迎えられた。・・・ウースターで講演にのぼった時は、あたかも信じがたい白昼夢の実現であるように思われた。”(pp.67-68)

このように、S.Freud 自身が精神分析の展開と内容

を初めて語ったとするクラーク大学での講演において、精神分析療法の技法論として重要な方法である自由連想をどう語ったのか？

この講演の内容については、S.Freud は “Zur Geschichte der Psychoanalytischen Bewegung” (「精神分析運動史について」1914) において、英語の free association に当たる部分を、ドイツ語で次のように表現している。

“Ich hätte,wie bei früheren Veranlassungen,das »kathartische Verfahren《 von Breuer als ein Vorstadium der Psychoanalyse würdigen und diese selbst erst mit meiner Verwerfung der hypnotischen Technik und einführung der freien Assoziation beginnen lassen sollen.”(p.6)

以上の部分の翻訳(「フロイト著作集 10」pp.255-310)での日本語訳は次のようになっている。

“ブロイヤーの「浄化的治療」は精神分析のいわば前段階として片付けるべきであったろうし、催眠術を私が捨てて自由連想法を導入することによって、ここによく精神分析なるものが始まったのだ。とすべきであったというわけである”(p.256)

上記のように、S.Freud はクラーク大学の講演においては、“freien Assoziation”すなわち、“free association”自由連想という表現をしている。因みに、この文章は、AA.Brill によって、“The history of the psychoanalytic movement”として 1916 年に英訳されており、“I should have dignified Breuer’s “cathartic procedure” as merely preliminary to psychoanalysis, and should have claimed that psychoanalysis itself only began with my rejection of the hypnotic technique and my introduction of free association”.(p.1) となっている。ここから 1914 年には、S.Freud 自身が、自分の方法を freien Assoziation と言っていることがわかる。

しかし、S.Freud は、Die Traumdeutung(「夢判断」1900)の中において、以下のように叙述している。

“Die hier geforderte Einstellung auf an scheinend freisteigende《 Einfälle mit Verzicht auf die sonst gegen diese geübte Kritik scheint machen Personen nicht leicht zu werden.”(p.116)

このように、“Die Traumdeutung”においては、S.Freud は、独語で freisteigende Einfälle という(教文社版「夢分析」p.113 においては、freisteigende Einfälle を《自由に浮かびあがってくる思いつき》と訳している)言い回し表現をしている。freisteigende は、frei(「自由な」という意味)と steigen(「上昇する」という意味)からできている単語なので、教文社版において、「自由に浮かび上がってくる」と日本語訳

では、S.Freud の意味を十分に捉えて翻訳している。また、“Die Traumdeutung”を英訳した AA.Brill(1913) は、“freely rising”idea と表現しており、この翻訳も S.Freud の意味をかなり正確に反映させようとしていると考えてよいだろう。

その後を見てみると、S.Freud は、前掲の 1925 年の“Selbstdarstellung”（教文社「自らを語る」1959）の他には、1938 年の“Abriss der Psychoanalyse”（「精神分析学概説」1983 年、人文書院）においては、“freien Assoziationen”と表現するようになっており、これはもはや英語の free association（自由連想）である。1914 年以降は、やはり S.Freud は、自由連想（freien Assoziation）という表現で統一していると考えてよい。

本研究においては、具体的に S.Freud のどの文献の英語への翻訳において、C.Rycroft が言うように、AA.Brill の『誤訳』が発生しているのかについては、発見できていない。しかし、夢分析において、S.Freud の“freien Assoziationen”の初期の表現である“freisteigende Einfälle”のニュアンスは、AA.Brill において、十分に検討して翻訳されていると考えられる経過からすると、C.Rycroft が、“A Critical Dictionary of PSYCHOANALYSIS”で記述しているように《Brill の誤訳》と断定した背景に何があるのか？おそらく《翻訳の正しいあり方》という翻訳論を基本に置いた上での《誤訳》判定であろうが、前述したように、翻訳者の AA.Brill が翻訳の初期において S.Freud の意味を探し、伝えようとしていることからすると、《誤訳》と断定するに至る、そのプロセスにあり得たかもしれない《翻訳論を越える何か》を空想させる。

おそらく実際的には、C.Rycroft は、S.Freud が“freien Assoziationen”とシャープに言い切っていない段階で、おそらく AA.Brill が歯切れよく“free association”と翻訳している文献の存在を見つけているのであろう。とするならば、S.Freud が AA.Brill の翻訳書における、“free association”を知ってから、“freien Assoziationen”を使うようになったのだろう。その時に、S.Freud にどういう思いがあったのだろうか。このあたりのことについては、さらに S.Freud の膨大な文献の海を注意深く、ひと波ずつ掻き分けるように泳ぎ切らないと「その時」を見つけれないであろう。

今回の文献研究の範囲内においては、少なくとも S.Freud は「誤訳された」という反応はしていないにも関わらず、C.Rycroft が明確に「誤訳」と記述しているという霧のような背景事情をいろいろな人間関係において想像しながら、次のⅢの項では、視点を変えて探してみたい。

Ⅲ. AA.Brill は S.Freud の精神分析グループの弟子グループの中で、どういう関係性の中にいたのか？

S.Freud が精神分析という治療方法が確立する流れの中で、S.Freud を師匠として集まった弟子たちの中において、AA.Brill はどういう位置関係にあったのだろうか。この点について、Ernest Jones の「フロイトの生涯」（1961）において検討したい。

この「フロイトの生涯」によると、AA.Brill と E.Jones の S.Freud との関係は、ほぼ同時に始まっていると考えてよい。ウィーン精神分析協会（1902 年の秋に始めた、毎水曜日の夜、S.Freud のクリニックの待合室に集まって議論する「心理学水曜会」が発展したもの）の始まりは、E.Jones によれば明確ではない。このウィーン精神分析協会の初期に客として招待されているのは、1907 年 3 月 6 日に CG.Jung と L.Binswanger、1907 年 12 月 18 日の K.Abraham、1908 年 5 月 6 日が AA.Brill と E.Jones であった。

E.Jones は、1907 年 11 月の終わりにチューリッヒで CG.Jung と 1 週間過ごしている時に、ニューヨークから来ていた AA.Brill と会っている。ちょうど、チューリッヒで「フロイト・グループ」と呼ばれる小さなグループが発足したところであった。このグループの指導者は、CG.Jung であった。E.Jones が CG.Jung に「フロイトの仕事に興味を持つものが一堂に集まるような手筈を整えるのがいいのではないか」と提案して、翌年の 1908 年 4 月にザルツブルグでそういう会が開かれた。この会合については、E.Jones は「国際精神分析学会」、CG.Jung は「フロイト心理学会」を主張したが、S.Freud は私的な会合であり、そういう名を掲げるべきではないとした。

この場では、9 つの演題が用意され、S.Freud は最初に「強迫神経症の一症例に関する考察」（後に、ねずみ男として知られる症例）という症例報告をした。S.Freud の報告は、朝の 8 時に始まり、11 時まで続いた。S.Freud は「これで十分であろう」と言ったが、参加者が「もっと続けて欲しい」と言い張ったので 13 時まで続けられたという。

以上のように、AA.Brill は E.Jones とならんで、ともに初期からの S.Freud をとりまく研究者であった。それだけに、E.Jones の AA.Brill に関する描写は、E.Jones の主観的部分も含めて参考になると思われる。

この論文の発表会の後の集まりにおいて、“精神分析学精神病理学年報”という雑誌の出版が決定された。これは精神分析学に関する最初の雑誌で第 1 次世界大戦の勃発時まで発刊された。

E.Jones によれば、この 9 つの演題が用意された発表会（この大会は、後に第 1 回国際精神分析学会とされた）の後、AA.Brill と二人でウィーンに行き、

S.Freud 一家の気持ち良い歓待をうけたという。

“AA.Brill が S.Freud の著作を翻訳する権利を願ったのはこのころのことで、S.Freud はその気になって、むしろ軽率にこれを与えた”(E.Jones 「フロイトの生涯」 p.263)

そして、このことに対して E.Jones は、同書において、次のように記述している。

“私自身はそれに対してかなり助かったという感じを抱いた。なぜなら私はすでに従事していた自分自身の仕事の計画に没頭していたし、経験上翻訳がどんなに時間を取られるものか知っていたからである。”

(「フロイトの生涯」 p.263)

“AA.Brill には明らかに英語にもドイツ語にも十分な力がないことがやがて私には心もとなく思われ、私が原稿を読んで、気になる点を提示して彼に再考してもらってはどうかと申し出た。私の名は出さぬ約束の下にである。何といても英語は私の母国語であるのに対して、AA.Brill にしてみれば英語はニューヨークにきたころ、不満足な環境の中で聞きおぼえた言葉なのであった。しかし、彼はこの申し出を拒絶した。おそらくそれを自分の語学力に対する非難ととったからであろう・・・私が今さら AA.Brill の訳を非難する必要はない。他の人びとがもう十分今までに非難している。2、3年後に私が S.Freud にむかって、彼の仕事が英語を話す人びとにもっと立派な形で示されていないのは残念だといった時、彼は「良い翻訳者よりはよい友人の方を選びたい」と答え、それに続けて私が AA.Brill に嫉妬していると非難した。私が嫉妬するわけはなかったのであるが、何によらず S.Freud の意見を変えるのは難しく、私は二度とそのことについて話をしなかった・・・AA.Brill が若いころに洗練される機会を比較的欠いていたことも、彼が美しい心をもっていたという肝心の重大な事実をかくすものではない。最初から私は、我々は二人の前にあるアメリカでの共通の仕事をやまくやっていると感じた。そして私は彼がどんな時にも示してくれるあれほど忠実さをもった友人を他には知らないのである”(「フロイトの生涯」 p.263)

AA.Brill は、オーストリア生まれで、ほとんど英語を知らない状態で渡米し、ニューヨーク大学とコロンビア大学に学び、アメリカ合衆国で精神分析医として活躍した最初の実践家であった。前述したように E.Jones とは早い時期から一緒に、S.Freud の勉強会・心理学水曜会に招かれたり、ウィーンの S.Freud を尋ねたりしており、E.Jones に“あれほど忠実さをもった友人を他には知らない”と言わせるほどの近い友人関係にあった。その一方では S.Freud を頂点とする 3 者関係において E.Jones は、上述の「フロイトの生涯」

の引用から読み取れるように、当然ともいえる抑えきれない競争心、嫉妬心の感情の中にあっただけであろうことは、容易に推測できる。

1908 年 12 月にアメリカのマサチューセッツ州、ウースターのクラーク大学・学長の Stanley Hall から、翌年 8 月の大学創立 20 周年記念式典での一連の講演に招待された。その背景には、1902 年秋からフロイトが中心になって始めた「心理学水曜会」が発展した「ウィーン精神分析協会」があり、1908 年にはザルツブルグで精神分析学関連の 9 演題の発表会が行われるという精神分析学のうねりがヨーロッパで起き始めていたことがあった。ザルツブルグでの会議では CG.Jung も重要な役割を果たした。こういう上昇気流の流れの中でアメリカ・マサチューセッツの 大学学長 S.Hall からの講演依頼は、E.Jones も言及しているように、じわじわと S.Freud を興奮させるものであった。

“S.Freud はこの予定に段々興奮を感じるといった”(「フロイトの生涯」 p.269) と E.Jones は表現している。

アメリカでの講演から帰ると、第 2 回国際精神分析学大会に向けての活動が具体化に向けて動き始めた。“1909 年には、最初の大会の組織者であった S.Freud も CG.Jung も、アメリカのウースターでの講演に気を取られていたので、この年に大会を開く問題ははっきりとはおこらなかつた。けれどもできるだけはやく次の大会を開こうという熱意から、翌年の春に次の大会を開く手配が整えられた。大会の手配は、前回同様、CG.Jung に任せられ、第 2 回国際精神分析学大会は 1910 年 3 月 30 日、31 日にニュールンベルクで開かれた。”(「フロイトの生涯」 p.275)

次に、「フロイト最後の日記 1929~1939 The Diary of Sigmund Freud」(1992) から、関連情報を拾う。この本はロンドン・フロイト記念館が編集(「はじめに」の項は、Michael Molnar が記述)したものである。

“1986 年 6 月、ロンドンでフロイト記念館が開館される 1 か月前に、フロイトの机上にあった幾つかの文書が目録に登録された。その中に、大学ノートの大きさが 20 枚ほどの紙の束があつて、それには日付と短いコメントが、紛れもないフロイトのあのゴシック体のごつごつした筆跡で書かれていた。第 1 ページ目の上部に「Kürzeste Chronik (最短日録)」と記されアンダーラインをつけてある。”(「フロイト最後の日記」はじめに p.VII) から始まる<はじめに>のページが冒頭にある大判(23cm×31cm)の写真集とも思える 3cm の厚さをもつ本である。

1929 年から始まる、最短日録の中身の第 1 行目には、“31 Okt. Nobelpris übergangen” übergangen の文字は読み取りにくい、「ノーベル賞を逃した、無

視された、見送りになった」と言っているようである。この1行だけの日録の最後は、1939年8月になっており、その8月の1日の行には、開業終了とあり、25日に最終の日録があり、「エヴァ ニースへ/ ドロシー N.ヨーク / 戦争恐怖」との記載が見られる。エヴァとは孫娘のことで、ドロシーとは研究者 **Dolothy Burlingham**、戦争恐怖というのは、ドイツがポーランドへの圧力を強めて進行したのに対して、英国がドイツに最後通牒を送り、返答のないドイツに宣戦布告するに至った。この状況に起因する戦争恐怖のことである。この最後の日録から間もない、9月23日(土曜日)午前3時に死を迎えた。

“「ノーベル賞見送られる」のそっけない1行については、この頃何度もノーベル賞の候補に推薦されていたようである。しかし、「世の中の8分の7を敵に回しているのだから、その世の中から承認されるなんてことを期待するのは馬鹿げているでしょうね」（フロイト最後の日記 p.43）と親しいフェレンツィへの手紙（1915年10月31日）の中に書いていた。

1915年以降、このノーベル賞に関することはフロイトのいら立ちの一つになっていたという（同書 p.44）。

さらに、この「フロイト最後の日記」の1932年の中において、精神分析の考えを広めるために国際精神分析出版所はなくてはならない手段だと考えたこと、しかし、その出版所は財政危機に陥っていることなどが書かれている。1932年1月の出版所への寄付金名簿には、**AA.Brill**が1000ドル集めた記載がある。

AA.Brillは、1911年にはニューヨーク精神分析学会を設立し、アメリカに精神分析を紹介し定着させる先駆者として重要な働きをした。1912年には「精神分析：その理論と現実への応用」を出版して、初めて精神分析を擁護する考え方を明確にした。その後、**AA.Brill**はニューヨーク大学医学部の精神医学教授、コロンビア大学精神分析学講師をつとめた。

「フロイト最後の日記」には、次のような記述がある。

“ブリルが英訳した「夢判断」は1913年に初版が出た。1932年には全面的に改訂された第3版が・・・発刊された。この時フロイトはこの改訂版を受け取ったのだと思われる。ドイツ語が母語のブリルは、英語を一言も話せぬまま、少年の時に米国へ移住した。彼の翻訳には多くの人々から批判を浴びせられたが、ブリルの個人的献身と先駆的仕事にフロイトは感謝していた。このブリルの訳書について、フロイトはこう書いている。「仮に精神分析が米国人の知的生活の中で現在一つの役割を果たしているか、あるいは将来果たすのであれば、ブリル博士のこの本や他の活動のおかげでしょう」（p.143）

さらに、「フロイト最後の日記」1935年10月28日の1行の「最短日録」には、“自己を語る”とだけの記載があり、「フロイト最後の日記」の本文の198ページには、次のような説明がある。

“1935年6月にアーネスト・ジョーンズはフロイトに手紙を送り、国際精神分析叢書の一部として出版するために、『自己を語る』（1925）と『制止、症状、不安』（“*Hemmung, Symptom und Anger*”1926）との権利をホガース社に売る気はないか、と尋ねた。ジェームズ・ストレイチャーが『自己を語る』への「優れた補遺」の翻訳にあたることとであった。フロイトは直ちにこの計画に賛成して、ストレイチャーを「いちばん望ましい翻訳家」だと付け加えた。この英訳書を受け取った翌日に、彼はジョーンズとストレイチャーに礼状を出している。”（p.198）

これに先駆ける1935年4月21日に、**E.Jones**は初めて家族同伴でフロイトを訪れており、その時の**S.Freud**の様子を通して**S.Freud**との心理的距離の近さを描写している。“フロイトは私の5歳になる娘の鼻を自分の2本の指の間にはさんで、娘を驚かせた。しかし娘は去勢を象徴するこの仕草には気をとめないで、すぐに人形を差し出して、彼の心を捕らえた。当時13歳だった息子には、フロイトが蒐集していた古代遺物を数点渡して、考古学を職業に選ぶのも興味深いと勧めたが、文学好きの息子は応えようとしなかった。あんな愉快な子どもたちには滅多に会ったことがないと、フロイトが次の手紙で書いて来たことを、父親としては誇らしげに記さねばなるまい。その後、彼はいつも子どもたちのことを尋ねてきた。あれほど子ども好きな人物はそんなにいないだろう”（pp.189-190）

この1カ月後に、**E.Jones**は**James Strachey**の翻訳の話を提案しているのである。これが、その後の**S.Freud**の翻訳の標準版(standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud in English)として知られる偉大なる24巻に繋がることになったのである。

最後に、このⅢの項についてまとめておきたい。最初に問題提起していた「free associationは**AA.Brill**の誤訳であったのか？」については、「誤訳ではなかった」という結論を出しておきたい。確かに**AA.Brill**の翻訳を、**S.Freud**の本文と照らし合わせながら読むと、「**S.Freud**の原文を簡単な文章に翻訳してしまっているな」と思う部分は散在する。また、**E.Jones**が紹介した**J.Strachey**の翻訳を見て「一番望ましい翻訳家」としている。しかし、“freie Assoziation”の前段階での“freisteigende Einfälle”“freigende Einfälle”などについては、前述したように、その意味するところを十分に考えて翻訳していると考えられるのである。オー

ストリア人として生まれ、英語を知らないままアメリカに移り、ニューヨークにいてニューヨークでの精神分析の中心的な立場にしながら、今一つ実態としてその立場を認められない。それでもニューヨークにおいては AA.Brill は重要な key man であり、S.Freud は AA.Brill に対して、次のような距離と関係性を保ち続けていた。“彼の翻訳には多くの人々から批判が浴びせられたが、ブリルの個人的献身と先駆的仕事にフロイトは感謝していた”(「フロイト最後の日記」 p.143) “ブリルを好きで、ブリルの難しい立場にも同情した”(「フロイト最後の日記」 p.129)。

IV. 治療法としての自由連想に辿りつくまでの経過

ウィーン大学の Ernst Wilhelm Brücke 教授の生理学研究室に落ち着き、神経系の組織学に関する研究で十分な満足を得ていた S.Freud が、神経系の生理学的研究から、1885 年の秋に、多額の奨学金を得て、19 週間、パリの JM.Charcot の研究室に学ぶ。この Charcot の下で催眠によるヒステリーの治療を学び、S.Freud はウィーンに帰り、そして 1889 年の夏に、再びフランスのナンシーを訪れている。このことについて S.Freud は「自叙・精神分析 (Selbst Darstellung) (1925) の中で次のように著している。

“自分の催眠術の技術を完全にしようと考へて、私は 1889 年の夏にナンシーに赴き、そこに数週間滞在した。労働者階級の貧しい婦人や子供たちに施術している年老いたリエボアの感動的な姿を見、またベルネームが自分の病院の患者に施した驚くべき実験を目撃して、私は人間の意識には隠されている強力な精神的過程がありうるのではないかとこのきわめて強い印象を与えられた”(p.18)

このように生理学研究室における脳解剖学研究から、催眠研究と催眠による治療、そして現在に繋がる自由連想法による心理療法に繋がることになる。アーネスト・ジョーンズの「フロイトの生涯」の中に“自由連想法の発見がいつであったか正確な時期はわからない。わかっているのは、それは 1892 年から 1895 年にかけてに展開し”(p.168)との記述が見られる。1892 年は、エリザベート・フォン・R の治療開始の時期である。エリザベートの症例において、自由連想という表現は見られないが、その方法についてエリザベートに前額法を使いながら「このようにしなさい」という方法について、S.Freud は詳しく具体的に説明をしている。エリザベートの直前には、1889 年 5 月 1 日からエミー・フォン・N 夫人の治療に当たり、1890 年頃まで治療の延長線上での関わりがあったようである。

以下、S.Freud の 1895 年の Studien über Hysterie (日本版では日本教文社・フロイト選集・9「ヒステリ

ー研究」1955) の中の 2 つの症例 (Frau Emmy v.N と Fräulein Elisabeth v. R) の治療過程における S.Freud の治療技法の変容から、催眠から前額法へ、そして更に、自由連想的な方法への流れを追いかけることにする。

1. エミー・フォン・N 夫人 (Frau Emmy v.N)

<1889 年 5 月 1 日～>エミー・フォン・N 夫人が 40 歳。S.Freud が 33 歳の時の症例である。日本教文社版の「ヒステリー研究」では、pp.3-97 に収載され、その最初の部分に以下のように紹介されている。

“その病状と人柄に大いに興味を抱いたので、わたしはこの婦人に時間の大部分を割き、彼女の回復をわたしの任務と考えるようになった。彼女はヒステリー患者だったが、わけもなく夢遊状態にすることができた。そこで、これに気づいたわたくしは、催眠下でいろいろききだすためにブロイエル療法を彼女に適用することを決心した。”(p.3/5 月 1 日)

“彼女はいちじるしく催眠にかかりやすい性質をもっている。一本の指を彼女の目の前にさしだして、お眠りなさい、という彼女が自失と混迷の表情をしたまま、うしろにのけぞってしまう”(p.7/5 月 2 日夕刻)

5 月 12 日の催眠に導いた治療の中で、「怖い夢を見た。椅子の足や肘掛椅子のもたれかけがすべて蛇になった。一匹の秃鷹の嘴みたいなものをもった怪物が、彼女にとびついてついばみ」という夢をかたりはじめる。その後、彼女の身体症状の胃の痛みについて、「何に由来するものか」を問いかけるが「そんなこと存じませんわ」と言う。そこで私が、

“明日までに思い出しておくようにと彼女にいつけた。すると彼女はてんで不機嫌になって、これは何のせいかわ、あれは何に由来するものか、としょっちゅう問いただすものではないので、こちらが言おうと思っていることをしゃべらせていただきたい、と語った。わたしがそれに同意する”(p.29) ①

この日の、アンダーライン部分の出来事は、S.Freud の治療者の態度を変えさせることになるきっかけになっている。すなわち、『患者に自由に話させるという分析者の態度のあり方』に繋がっていく体験となっている。このエミー・フォン・夫人との心理療法の中で学んだ心理療法あり方は、次のエリザベートの治療の中で『フロイトの精神分析療法の確立』に繋がっていくのである。このエミー・フォン・N 夫人との一日に 2 回の治療をするような集中的な治療は 7 週間続けられ、その後、「彼女をバルト海岸の郷里に帰してやった」と記録されている。1890 年 5 月における訪問以降は、“エミー・フォン・N 夫人の情報は次第に乏しくなっていく”(p.66)となっている。

2. エリザベート (Fräulein Elisabeth v. R)

“1892年の秋、ある親しい同僚が、一人の若い婦人の診察を頼んできた。彼女は二年以上も前から両足に疼痛を覚え、歩行に困難を来しているのだった”

(p.148) から、エリザベートの症例は始まっている。

“エリザベート嬢のばあい、わたしははじめから、彼女が疾患の原因を意識しているものと推測していた。・・・それゆえにわたくしは、はじめしばらくのうち、催眠術の必要はないと考えていた。・・・この症例は、わたしが手がけたヒステリー分析における最初の完全な分析であった。この例で、わたしは独自の処置を発見し、その後これを一つの方式にまで高め、爾来それにのっとって大過なきを得ているのである。その処置は、重層的な病原的心理素材を順次にとり出して、処理することである。・・・わたしはまず、患者に起こっているかぎりのことを語らせて、どこかに関連の不可解なところや、原因連鎖の一環が脱落していると思われるふしはないかと、綿密な注意を注ぐのだった。・・・エリザベート嬢の語る疾患史は、いたましい体験の数々によって織りなされる長い物語であった。話すあいだ、彼女は催眠状態にはならなかったけれども、そのかわり、わたしは彼女を横臥させ、目をつぶらせておいた。・・・物語のある部分が彼女の心をとらえると、彼女がひとりで類催眠状態におちいるかのようになり、わたしには思われた” (p.154-155)

“患者を深い催眠状態におちいらせなければならなかった。ところが困ったことに、この患者は、そうするための手順をいくらやってみても、さきほど告白を行なったとき以上の意識状態に移してやることが決してできないのだった。” (p.164) ②

“わたくしは、この患者の病歴をつづける前に、その治療の第二期における彼女の態度について一言つけ加えておきたい。わたくしは、この分析全体を通じて、相手の頭に手をあてることによって、心像や着想を呼び起こさせる方法を用いた。これは、患者の完全な協力と自発的注意がなくては、用をなさない方法であることはいうまでもない” (p.177) ③

この p.177 からの引用のアンダーライン部分の S.Freud の原文をここに、引用したい。

“Ich bediente mich während dieser ganzen Analyse der Methode, durch Drücken auf den Kopf Bilder und Einfälle hervorzurufen, einer Methode also, die ohne volles Mitarbeiten und willige Aufmerksamkeit der Kranken unanwendbar bleibt.

この S.Freud からの引用文の中にある“Einfälle”に注目したい。これは本論文の 2 ページで触れている、自由連想の「連想」につながる key word なのである。

“エリザベートは、わたしの手の圧迫のもとでいつで

も何か心に浮かべるか、または、何かの像を眼で見るのだが、必ずしもそれをわたくしに報告する気持ちにならないで、むしろ、ときとすると、いったん呼び出したものを、またもおさえつけようと試みたりしていたのである・・・彼女が、何も思い浮かびませんでした、といっても、もはやわたくしは承知しなかった。あなたは必ず何かを思い浮かべたはずです。気がつかなかったのかもしれませんが、ひとつ圧迫をやりなおしてみましょう。” (p.178) ④

“わたくしは、この困難な治療をつづけるうちに、いつのまにか、患者が回想再現のさいに示す抵抗に、いっそう深い意味をおくようになり、抵抗がとくに顕著にあらわれる誘因を、慎重に比較検討しはじめたのである。” (p.179) ⑤

最後に、アンダーラインを入れた①～⑤についてまとめて取り上げたい。

①は、エミー・フォン・N 夫人から「とにかくまず、私の話したいことを黙ってじっくりと聴いてください」と言われて、患者に自由に語らせることの重要性に直面した場面である。

②は、S.Freud はあまり催眠法が技術としてうまくなかった。それに加えて、エリザベートは催眠状態に入りにくい人であったため、S.Freud が催眠から離れられることになった、「自由連想」の方向性を持つという意味あるポイントとなったと考えられる。

③催眠に代わって、頭を手で圧迫する（前額法）ことによって、心像や着想を呼び起こさせるきっかけをつかんだ。自由連想に大きく舵を切るきっかけとなった。

④と⑤は、心理療法の過程で患者の側に起こってくる抑圧、抵抗への直面とそういう抵抗を「心理療法的に扱っていく」と言う力動的な理解への気づきと広がりに進んでいく決定的とも言える大きなポイントになっている。

このような流れのなかに、S.Freud の自由連想に至る歴史の本流に至る源流を読み取ってよいのではないだろうか。

引用文献

- Brill,A.A. (1916) The history of the psychoanalytic movement. The Nervous and Mental Disease Publishing Company, New York.
 Brill,A.A. (1913) The Interpretation of Dreams. The Macmillan Co., New York.
 Freud,S. (1940) Abriss der Psychoanalyse. Int. Z.Psychoanal. Imago, 25(1), 7-67.
 Freud,S. & Breuer,J. (1895) Studien über Hysterie. Verlag Franz Deuticke Leipzig und Wien.

- Freud,S. & Breuer,J. (1895) Studien über Hysterie.
Verlag Franz Deuticke Leipzig und Wien. 懸田克
躬・吉田正己(訳)(1955)ヒステリー研究 フロイド選
集 9.日本教文社・東京.
- Freud,S. (1900) DIE TRAUMDEUTUNG.
Franz Deuticke, Leipzig und Wien.
- Freud,S. (1900) DIE TRAUMDEUTUNG.
Franz Deuticke, Leipzig und Wien 高橋義孝・菊盛
英夫(訳) (1969)夢判断(上).日本教文社,東京.
- Freud,S.(1914) Zur Geschichte der psychoanaly-
tischen Bewegung. Jb.,Psychoan, 6, 207-260
- Freud,S.(1925) SELBST DARSTELLUNG.
Imago Publishing Co.Ltd., London.
- Freud,S.(1925) SELBST DARSTELLUNG.Imago
Publishing Co.Ltd., London.懸田克躬(訳) (1959)自
らを語る.日本教文社,東京.
- Freud,S.(1925) SELBST DARSTELLUNG.Imago
Publishing Co.Ltd., London.生松敬三(訳) (1999)
自叙・精神分析.みすず書房,東京.
- Freud Museum Publication(1992) The Diary of
Sigmunt Freud 1929~1939. Freud Museum
pablications,London 小林司(訳)(2004)フロイト最後
の日記 1929~1939.日本教文社,東京.
- Gay,P. (1988) FREUD A Life for Our Time.
W.W.Norton&Company,Inc, New York/London.
鈴木晶(訳) (1997) フロイト.みすず書房,東京.
- Jones,E.(1961) The Life and Work of Sigmund
Freud.Basic Books Publishing Co., New York. 竹
友安彦・藤井治彦(訳) (1964)フロイトの生涯.紀伊國
屋書店,東京.
- 小此木啓吾(訳) (1983) 精神分析学概論 著作集 9.人
文書院, 東京.
- Rycroft,C. (1972) A Critical Dictionary of PSYCHO-
ANALYSIS. Penguin Books, New Zealand
- Rycroft,C. (1972) A Critical Dictionary of PSYCHO-
ANALYSIS. Penguin Books, New Zealand. 山口泰
司(訳) (1992)精神分析学辞典.河出書房新社,東京.